

【現代語訳】

相模守時頼の母は、松下禪尼と申し上げた。時頼を迎え申し上げなせることがあったとき、すすけている紙障子の破れたところだけを、禪尼が自らの手で、小刀を使って切ってはお張りになっておられたので、兄の城介義景が、その日の準備をして側に控えていたが、「(その障子を) いただいて、○○という男に張らせましょう。そのようなことに精通している者でございます」と申し上げなされると、「その男は、尼(〓私)の腕前には決して勝てないでしょう」と言つて、やはり一マスずつ張り替えなさせているのを、義景は、「全部を張り替えますれば、はるかに簡単に仕上がるでしょう。まだらになってございますことも、見苦しくはございませんか」と重ねて申し上げなされたところ、「尼(〓私も)、後々はササつと張り替えようと思うが、今日だけはわざとこのようにしておくのがよいのです。物というのは、壊れたところだけを修理して使うのだぞ、と若い人に見習わせ、気付かせようとしているのです」と申し上げなされたことは、たいそう滅多にない(素晴らしいこと)であった。

世を収める者は、儉約を基本とする。女性であるのに、禪尼は聖人の心に通じている。天下を治めるようほどの人の子にお持ちになつていて、まことに並みの人ではないということよ。